

研究テーマ：同性愛に対する潜在的態度測定法における妥当性の検討	
研究代表者：大学教育実践センター 准教授 松高由佳	連絡先：ymatsutaka@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：なし	
【研究概要】 同性愛者への差別・偏見の問題は未だ解消しておらず、問題の低減には人々の意識的態度のみならず潜在的態度にも着目する必要がある。しかし、同性愛への潜在的態度測定法の妥当性はこれまでにあまり検討されていない。そこで、本研究では潜在的態度測定法「FUMIEテスト同性愛版」の妥当性を検討した。その結果、同テストは弁別的妥当性を有していることは示唆されたが、収束的妥当性は確認できなかった。本研究では同テストの妥当性における限界点を示唆した一方、妥当性を検討するための方法上の課題について考察した。	

【研究内容・成果】

1. 目的

同性愛者に対する人々の意識調査では近年肯定的な変化がみられている。一方で当事者へのいじめや差別の問題は未だ根強く、彼らにストレスを与えている(日高, 2024)。こうした問題を低減するための介入では、同性愛に対する態度における意識的側面だけではなく潜在的側面にも着目する必要がある (Greenwald, et al., 2009)。

そこで、本研究では同性愛者への潜在的態度測定方法として FUMIE テスト (Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions; Mori, et al., 2008) の妥当性を検討した。FUMIE テストは Greenwald, et al. (1998) による「潜在連合テスト IAT (Implicit Association Test)」をベースとしているため理論的妥当性には問題がないと考えられる。しかし、FUMIE テストを同性愛者への潜在的態度の測定に用いた場合の弁別的妥当性、収束的妥当性についてはほとんど検討されていないため、本研究ではこれらの妥当性を検討した。

2. 方法

1) 研究参加者：リクルートに応じた大学生および大学院生 51 名（ゲイ条件 25 名、レズビアン条件 26 名）に実験を行った。実験時期は 2023 年 11 月～2024 年 3 月であった。

2) 測定項目：

- ①同性愛への潜在的態度 ゲイ版／レズビアン版 FUMIE テストを用いた。ターゲット単語を「ゲイ」／「レズビアン」と設定し様々な単語の中にターゲット単語を織り交ぜたプリントを研究参加者に配布した。良いことだと思う単語には「○」、悪いことだと思う単語には「×」をつけるよう指示し、この中でターゲット単語に「○」を付けるよう指示する試行と、「×」を付けるよう指示する試行を各 5 試行、交互に実施した。1 試行あたりの制限時間は 20 秒であった。ターゲット単語に「○」をつける 4 試行の平均作業量から、「×」をつける 4 試行の平均作業量を引いた値を IAS (潜在連想スコア: Implicit Association Score) とした (○×最初の各 1 試行目は練習試行として計算に含めない)。IAS が正の場合は潜在的態度が肯定的、負の場合は否定的を意味する。
- ②同性愛への意識的態度 古長 (2016) による「同性愛者受容感尺度」を使用。個人的受容感、社会的受容感の 2 因子 17 項目。高得点ほど受容感が高いことを意味する。
- ③フェイス項目 年齢、性別、同性愛者の知人友人有無など。
- ④同性愛に関する刺激提示による生理的指標の変化 唾液中の精神的ストレス指標 (クロモグラニン A 濃度、以下 CgA) の蛋白補正值を用いた。CgA の抽出と測定は矢内原研究所に委託した。CgA の増加は精神的ストレスの上昇を意味する。
- ⑤刺激映像に関する項目 視聴中への集中度、理解度、感想など。

- 3) 手続き：インフォームドコンセントを行い、同意を確認後、上記①②③について質問紙を用いて実施した。2 分間休憩の後、1 回目の唾液採取を行った（サリペット使用）。続いて同性愛者（ゲイ／レズビアン）が登場する映画を約 20 分間視聴させ、終了時に 2 回目の唾液採取を行った。最後に、質問紙を用いて⑤に回答を求めた。最後まで参加した協力者には謝礼としてクオカード 1000 円を提供した。ゲイ条件では、FUMIE テスト、同性愛受容感尺度、映像刺激ともゲイ版を用い、レズビアン条件では同様にレズビアン版を用いた。
- 4) 映像刺激：主要な登場人物がゲイ／レズビアンであることが明確に伝わる邦画を選定した。視聴する対象者に剰余変数となりうる心理的負荷を与えないようにするため、比較的穏やかな生活場面を中心に描いたシーンを抜粋して提示した。抜粋にあたっては臨床心理学の研究者 2 名で協議の上決定した。
- 5) 倫理的配慮：県立広島大学研究倫理審査委員会において研究計画の承認を受けた（承認番号 23HH012）。

3. 結果・考察

研究参加者の基本属性について、ゲイ条件では平均年齢 21.4 歳（ $SD = 2.5$ ）、性別の内訳は男性 6 名、女性 18 名、その他 1 名であった。レズビアン条件では平均年齢 21.2 歳（ $SD = 2.8$ ）、性別の内訳は男性 6 名、女性 19 名、その他 1 名であった。

IAS と意識的態度の指標である同性愛受容感尺度得点との関連性を検討するため、ピアソンの積率相関係数を算出したところ、いずれの条件においても両変数間に有意な相関はみられなかった（ゲイ条件：個人的受容感 $r = -.08$, $p = .71$ 、社会的受容感 $r = -.10$, $p = .63$ 、レズビアン条件：個人的受容感 $r = -.13$, $p = .54$ 、社会的受容感 $r = .00$, $p = .99$ ）。このことから同テストが意識的態度とは別の側面、すなわち潜在的態度を測っており弁別的妥当性を有していると考えられた。

また、IAS と潜在的態度の指標である映像刺激視聴前後の CgA 増加率との関連性を検討するため、スピアマンの順位相関係数を算出したところ、いずれの条件においても両変数間に有意な相関はみられなかった（ゲイ条件： $r_s = .28$, $p = .17$ 、レズビアン条件： $r_s = -.17$, $p = .40$ ）。このことから、同テストの収束的妥当性は確認できなかった。

これらの結果は、FUMIE テスト同性愛版の収束的妥当性の乏しさを示唆する可能性がある一方、方法上の課題が影響している可能性も考えられるため、さらなる検討が必要と考えられる。例えば、両条件とも IAS の程度に関わらず映像視聴前より後の CgA が有意に増加していたことから、映像刺激が研究者の想定とは異なる作用をもたらした可能性も考えられる。方法上の課題への対処を検討し、FUMIE テスト同性愛版の妥当性をさらに検証していくことが必要である。妥当性が担保された潜在的態度測定方法確立することによって、同性愛者への差別低減のための啓発介入における適切な効果評価に寄与することができると考えられる。

4. 引用文献

- Greenwald, AG., et al. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, AG., et al. (2009). Understanding and using the Implicit Association Test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 17-41.
- 日高庸晴 (2024). LGBTQ+ の健康レポート. 医学書院.
- 古長治基 (2016). 性別および同性愛者タイプと同性愛者に対する受容感の関連. 九州大学心理学研究, 17, 45-51.
- Mori, K., et al. (2008). A paper-format group performance test for measuring the implicit association of target concepts. *Behavior Research Methods*, 40, 546-555.